ドラム缶総合メーカー ダイカン

創業100年史

DAICAN

ダイカン創業100年史目次

目次 ―― 1
ごあいさつ ―― 2
次の100年へ ―― 3･4
第一章.創業期 ―― 5
第二章.成長期 ―― 6
第三章.転換期 ―― 7･8
第四章.激動期 ―― 9･10･11
第五章.拡大期 ―― 12･13
関連会社のトピックス ―― 14
年表（当社の主な歩み） ―― 15･16
クラブ活動・レクリエーション ―― 17･18
会社概要 ―― 19
経営理念 ―― 20
製品ラインナップ ―― 21･22

ごあいさつ

2019年（平成31年）4月25日、当社は創業100周年を迎えます。この長い年月、多くの困難を乗り越え事業を継続してきたことは、私ども従業員一同の誇りとするところです。すべてのお取引先、株主各社、そして歴代の従業員の皆様に、篤く御礼申し上げます。

1919年（大正8年）4月、当社の前身である大阪製鑵所は、当時の大阪市淀川区長柄浜通（現、北区長柄）で、固形塗料用小型缶の製造を開始しました。その後事業の発展に伴い、1935年（昭和10年）に株式会社に改組。また1939年（昭和14年）には、海軍の要請により200L缶製造に着手。1944年（昭和19年）には、海軍監督工場に指定されています。太平洋戦争で被害を受けながら、その後朝鮮動乱の特需により経営を再建。1951年（昭和26年）には、新たに制定されたJIS規格を取得。鉄鋼メーカー傘下のドラム缶メーカーが連続ライン建設を進めるのに対し、多様な缶製品を手がける独自路線を進め、1958年（昭和33年）にはファイバー缶製造に着手しました。またこの間、経営主体は創業家から安田火災（現、損保ジャパン日本興亜）グループに移りました。

1983年（昭和58年）、周辺再開発を進める大阪市に創業地を売却し、此花区島屋に新工場を建設。1994年（平成6年）に、それまでの通称であったダイカンに社名変更。1996年（平成8年）には、神戸製鋼所、住友商事が資本参加し、翌年念願の200L缶連続ラインを建設しました。そして現在、200L缶、中小型缶、ステンレス缶、ファイバー缶を製造・販売する総合容器メーカーとして、お客様の様々なご要望にお応えしています。

一方で、長い社歴の中で幾度となく多角化事業から撤退。結果として、現在の事業規模にとどまっている現実があります。次なる100年を展望する時、成熟した国内市場、少子化、AI社会の到来など、環境激変が避けられません。お客様、社会のニーズも大きく変化することでしょう。こうした環境下、成長のためには新事業への挑戦が不可欠ですが、進出と撤退の歴史を繰り返すことはできません。保有する経営資源をもとに進路を精査し、効率の良い成長戦略を描く必要があります。容器事業を通じて社会の発展に貢献する。私どもはその経営理念を掲げて、更なる進化を遂げる所存です。関係者の皆様には、引き続きご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

代表取締役社長　　林　亮司
2019年4月

次の100年へ

これまでの HISTORY

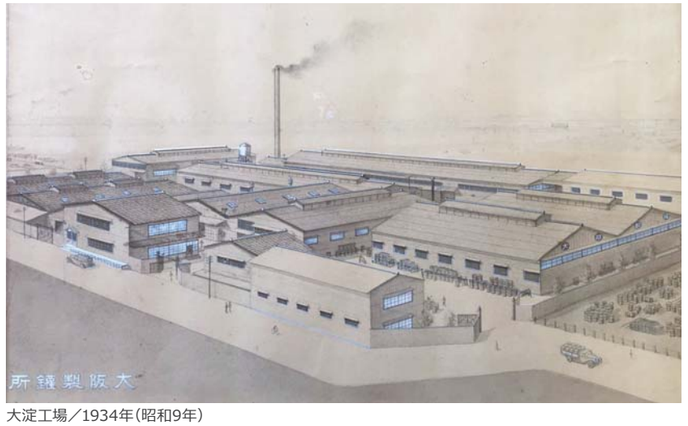
これからの STORY

ダイカンは、
品質第一主義を掲げ総合容器メーカーとして
唯一無二の存在となるため邁進して参りました。
しかし、私達が目指す
「容器事業を通じて社会の発展に貢献する。」
という経営理念にゴールはありません。
次の100年に向かって
これまでダイカンを支えて頂いた全ての方々に感謝し、
「挑戦」をテーマに
新しい価値を提供できる存在となるために
不断の努力を続けて参ります。

創業の礎、米屋と樽屋から固形塗料用鉄製丸缶の製造へ

第一章．創業期　1919〔大正8年〕－1938〔昭和13年〕

初代社長　吉房仁三郎



大淀工場／1934年（昭和9年）

明治時代、米屋と樽屋を併営していた吉房庄次郎の次男の吉房仁三郎が独立して、1919年（大正8年）4月25日に大阪市北区長柄で固形塗料用鉄製丸缶の製造販売を始めた。
仁三郎は岩井商店に在職中に塗料関係の仕事をしており、その関係でペイント缶の製造を思いたったと言われている。
これが大阪製罐所の始まりであり当社創業の礎である。
仁三郎が作った缶は評判がよく事業は順調に進展した。
その後、1935年（昭和10年）1月29日に資本金60万円の株式会社へ改組して株式会社大阪製罐所として新たなスタートを切った。
仁三郎は新製品研究のためドイツへ視察に行き帰国後、新製品「ドイツ式口輪オープン缶」を発売し大成功を収めた。

固形塗料用鉄製丸缶：当時ペイントは固形で、これをボイル油で溶きハケ塗りをしていた。
全口の押し蓋式の2～10L位の小型缶であった。
ドイツ式口輪オープン缶：胴の上部をカールした全口式総蓋の缶で内レバー式バンドで蓋を締めるタイプであった。
塗料、染料などの容器として使用され評価が高かった。

200L缶生産開始、中小型缶業界トップへ

第二章．成長期　1939〔昭和14年〕－1958〔昭和33年〕

二代目社長　吉房一雄

戦後再建設後大淀工場

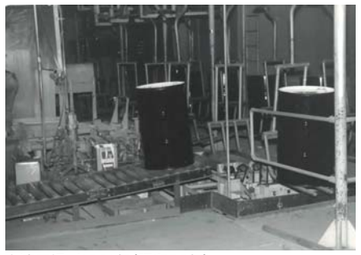
当時の主力工場である大淀工場では中小型缶を製造していたが、1939年（昭和14年）海軍の依頼を受け200L缶も製造を始め、1944年（昭和19年）には海軍監督工場に指定された。
仁三郎の死去により1942年（昭和17年）1月に庄次郎の四男である一雄が社長に就任、戦後までこの体制は続いた。
戦後は、戦中から200L缶を製造していたため、ドラム缶用鉄板の配給を受けることができ事業の回復は比較的早かった。
これにより「東洋唯一のドラム缶工場」と言われたが実態は戦災から免れた古い機械を寄せ集めただけであった。
しかし、最新鋭の自動巻締機が導入される等当時としては画期的な工場であった。
1948年（昭和23年）には関東地区の販売拠点として東京営業所を港区新堀町に開設して、酒造用添加アルコールを使用する醸造業界を中心に販路拡大に尽力した。
また、1949年（昭和24年）には総務課、労務課、倉庫課、経理課、製造課、板金課、木槽課を設置、1951年（昭和26年）に工場長制を導入して組織化を進めていった。
朝鮮動乱の特需に沸いたドラム缶メーカー各社は設備増強に走る一方、業界内では標準化が課題となっていた。
そのような中、業界一丸となった努力により1951年（昭和26年）JIS1601が制定され当社もいち早く取得した。
中小型缶においてもJISを取得したのに併せて最新の設備導入を行った。
これが奏功して業界内トップクラスに成長し、当社は全盛期を迎えた。

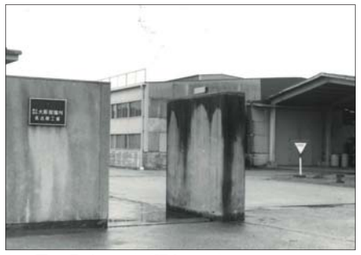
社会の出来事

- 1919（大正8年）　ヴェルサイユ条約締結
- 1935（昭和10年）　忠犬ハチ公が亡くなり、駅前に銅像が建立
- 1939（昭和14年）　第二次世界大戦勃発　国家総動員法による「国民徴用令」が公布・施行
- 1942（昭和17年）　関門海峡トンネル開通　ミッドウェー海戦
- 1948（昭和23年）　美空ひばりさんが「河童ブギウギ」でデビュー　極東国際軍事裁判判決
- 1951（昭和26年）　日米安全保障条約調印
- 1958（昭和33年）　皇太子・明仁親王と正田美智子さんが婚約

ファイバー缶事業へ参入、多角化、資本増強も200L缶は撤退へ

第三章．転換期　1959〔昭和34年〕－1978〔昭和53年〕


大淀工場／1961年（昭和36年）


名古屋工場／1966年（昭和41年）

千葉工場／1970年（昭和45年）

当社は、順調に業績を伸ばしてきたが、ドラム缶業界は大きく変貌を遂げつつあった。
すなわち、大口需要家は石油業界から化学業界へ移行し大量消費時代に突入した。
そのような状況に対応するため、ドラム缶メーカー各社も大量生産方式を導入する必要性に迫られた。
1959年（昭和34年）以降、当社を除くメーカー各社は、大手鉄鋼メーカーの傘下に入ることで多額の設備資金を調達し最新のオートメーション工場を各地に建設した。
当時の当社方針として200L缶のオートメーション化は行わず限定的な生産にとどめる一方、中小型缶部門を強化するため最新の設備導入と新製品開発を積極的に推進した。
中小型缶ではマーケットシェアトップの座を揺るぎないものとしたものの、当社の200L缶の地盤は侵食され続けることとなった。
また、太平洋戦争直後にアメリカからの援助物資として送られてきた脱脂粉乳の容器として使用されていたファイバー缶を鉄缶に代わる染料容器として1959年（昭和34年）3月から製造を開始した。
1961年（昭和36年）5月には大淀工場内にファイバー缶製造のための第二工場を建設、1966年（昭和41年）には名古屋工場、1970年（昭和45年）には千葉工場を建設、ファイバー缶事業は順調に推移した。
営業拠点も1963年（昭和38年）8月に名古屋営業所、翌1964年（昭和39年）10月には福岡出張所を開設した。
このような背景のもと、昭和30年代のダイカンは、中小型缶、ファイバー缶を主とする従業員数約350名、資本金2,250万円（発行株式数450,000株）の会社へと成長を果たしていた。
一方、吉房一雄は本業以外でも不動産事業等多角経営に尽力したが、成功を果たせず会社は資金難に陥った。
これを契機に1966年（昭和41年）7月に運転資金の補填を目的として安田火災（現、損保ジャパン日本興亜）、東亜火災（現、トーア再保険）、東洋火災（現、セコム損保）が主力となり第三者割当増資を引き受けて

当時の製品ラインナップ

ダイカン工業内のファイバー缶工場／1969年（昭和44年）

枚方工場／1974年（昭和49年）

資本金3,500万円（発行株式数700,000株）の会社となった。
これに先立ち円滑な資金調達を行うため、安田火災の影響力の強い東京へ本社業務を移管することとなった。
1964年（昭和39年）にまず経理部が東京へ移動し、1967年（昭和42年）に総務、業務、営業の各部門がそろい、本社機能の東京移転が完了した。
その後、1992年（平成4年）再び大阪に移転するまで本社機能は東京に置かれることとなった。
1967年（昭和42年）1月には安田火災出身者が社長に就任し、吉房一雄は会長に就任したものの同年2月に辞任した。
同年事業拡大のため倍額増資を行った結果、会社は資本金7,000万円（発行株式数1,400,000株）となり、大株主として安田火災、東亜火災、東洋火災、三井生命（現、大樹生命）が各々140,000株を保有するまでとなった。
1970年（昭和45年）にはファイバー缶拡販のため更なる倍額増資を実施、資本金は1億4,000万円（発行株式数2,800,000株）となった。
大株主は安田火災、東亜火災、東洋火災、三井生命が各々280,000株、大和銀行（現、りそな銀行）100,000株の状況であった。
これによりファイバー缶工場として1970年（昭和45年）に千葉工場を建設、1974年（昭和49年）にはファイバー缶塗装場付近の出火により全焼となった大淀工場内のファイバー缶工場を枚方工場へ移転した。
一方で1973年（昭和48年）に始まったオイルショックは当社にも大きな影を落とし人員整理、経費圧縮、生産縮小の措置を取らざるを得なかった。
特に当時生産効率の悪かった200L缶については、特殊品を除き自社生産から大半を他社からの仕入れで賄うこととなり、200L缶からの事実上の撤退となった。
オートメーション工場に対抗する手段がないための決断であったが、200L缶の需要家との関係は希薄になっていった。

社会の出来事

- 1959（昭和34年）
  - 化学業界を機軸として大量消費の時代に突入し
  - ドラム缶の需要が急速に拡大する
- 1961（昭和36年）
  - アメリカ第35代大統領にジョン・F・ケネディ就任
  - NHK朝の連続テレビ小説放送開始
- 1963（昭和38年）
  - 新千円札（伊藤博文肖像）発行
- 1964（昭和39年）
  - 東京オリンピック開催
  - 東海道新幹線開業
- 1966（昭和41年）
  - ビートルズ来日
  - 日本の総人口が1億人突破
- 1967（昭和42年）
  - 初の「建国記念日」
- 1969（昭和44年）
  - 人類初の有人月面着陸
  - 東名高速道路全区間開通
- 1970（昭和45年）
  - 日本万国博覧会開催

悲願の200L缶再参入、総合容器メーカーへ

第四章．激動期　1979（昭和54年）－1998（平成10年）

1. 大阪新工場建設

大阪工場／1983年（昭和58年）

富山営業所／1983年（昭和58年）

富山工場／1987年（昭和62年）

大淀工場は、太平洋戦争から朝鮮動乱期に建てられた建物が多く、また機械類も昭和10年代のものがあるなど、生産効率が悪く、昭和30年代には抜本的な改修をする必要に迫られていた。
しかし、大阪市の中心部に立地しているため工事には様々な制約があった。
このため、移転による新しい立地条件下での工場建設が検討され、大手製鉄メーカーとの合弁事業の計画などもあったが具体化には至らなかった。
昭和40年代に入ると大阪市の都市計画である淀川リバーサイド地区整備計画が発表され、当社敷地も計画地域に含まれていたことから工場改築及び移転問題は一旦凍結された。
昭和50年代に入ると淀川リバーサイド地区整備計画は本格的に動き始め、付近の工場も相次いで買収されていった。
土地収用法が発動されることが明白となったので、当社も代替用地の取得を急ぐことになった。
1982年（昭和57年）12月に大淀工場は大阪市に約45億円で買収され、1985年（昭和60年）3月までに長柄から立ち退くこととなった。
当社は買収前に先駆けて1982年（昭和57年）8月に此花区島屋2丁目の川崎重工大阪北工場跡地を購入、大阪工場として新工場建設に着手した。
そして1983年（昭和58年）12月に大阪工場建物が完成、機械設備の据付完了後の1984年（昭和59年）1月より生産が開始された。
しかし、トラブルが続出し、半年間は手直し・修理と徹夜作業が続いた。
従業員はこの過酷な環境下で果敢に挑戦し、労働組合の全面的な協力もあり乗り切ることができた。
トラブルには、設備欠陥によるものが多く、その後もトラブルは続き新工場の生産性を阻害する大きな要因となった。
このような中、生産性を改善するためTQC運動が展開され、Qアップ推進委員会が設置された。

同委員会は、事業所ごとに分科会、各現場では3～5名の小集団を作り、従業員全員に一人ひとりの役割、経営参加意識の植え付けなど従業員の意識改革が提唱され、各人の作業の見直しが実施された。
このとき作成された現場からの作業改善案は、その後のコストダウンに大きく寄与した。
一方、スチール缶と並ぶ当社の主力製品となったファイバー缶マーケットは順調に伸展してきた。
1985年（昭和60年）を過ぎると非常に多忙となり生産が需要に追いつかず、工場の拡張、新設が検討された。
1983年（昭和58年）12月富山に営業拠点を開設、1987年（昭和62年）には萩浦工業所有地を当社が賃借し富山工場を建設した。
また、中小型缶において1989年（平成元年）に最大のライバルである日本鉄缶の経営不振により当社が同社を吸収したことから、中小型缶のシェアは関西で80％以上を占めることとなり飛躍的に拡大した。

2. 苦難の道 ― 工場、営業所閉鎖

1989年（平成元年）以降は計画通りに販売缶数が伸びず当社の業績は低迷しており、全部門の体制見直しと合理化を余儀なくされた。
1992年（平成4年）6月にダイカン本社内で包装容器関連品販売を行っていたダイカン商事株式会社(1994年（平成6年）にデーケーシー開発株式会社と名称変更)に鉄蓋製造を追加登記し経営の効率化を図る努力を続けた。
しかし、富山工場は、大口需要家数社を対象に月産3万缶以上を目標としていたが、進出時点で操業の核と期待していた需要家からの受注がほとんど伸びず、さらに救済策として行ったファイバーパックの生産も軌道に乗らず、赤字が続き1993年（平成5年）8月に閉鎖した。
さらに、同年10月には富山、福岡、名古屋の各営業所が閉鎖となった。
千葉工場は、生産設備・建物ともに30年以上が経過し老朽が激しいことに加え、富山工場同様に操業当初の核と期待していた需要家、京葉工業地帯の工場群の受注が伸びず、1994年（平成6年）3月に閉鎖した。
これにより、ファイバー缶工場は、枚方工場と名古屋工場（1994年（平成6年）に東海工場に名称変更）の2工場となった。

3. シンボルマークの制定と社名変更

シンボルマーク

1992年（平成4年）4月本社を東京より大阪へ移転した。
1993年（平成5年）6月従業員の会社への帰属意識と従業員相互の連帯意識を高めるためシンボルマークを制定した。
交差する金の輪はスチール缶及びファイバー缶の断面で、バックのブルーは「清浄」を表している。

社会の出来事

- 1973（昭和48年）
  - オイルショックが始まる
- 1974（昭和49年）
  - 長島茂雄選手（巨人）現役引退
  - 戦後初のマイナス成長
- 1982（昭和57年）
  - 500円硬貨登場
  - 東北新幹線、上越新幹線開通
  - ソニーが世界初のCDプレーヤー発売
- 1983（昭和58年）
  - 東京ディズニーランド開園
  - 任天堂が「ファミリーコンピュータ（ファミコン）」を発売
- 1987（昭和62年）
  - 国鉄の分割・民営化によりJRグループが発足
  - 世界の人口が50億人突破

1994年（平成6年）4月25日をもって社名を「株式会社大阪製罐所」から「ダイカン株式会社」へ変更した。
その理由としてスチール缶専業メーカーからファイバー缶を含めた総合容器メーカーに成長したこと、大阪の文字が関東地区に馴染みにくいこと、既に「ダイカン」の略称が浸透していたことが挙げられた。

4. 悲願―200L 缶工場新設

本社

大阪工場内

恒常的な赤字体質からの脱却が喫緊の課題であったことから、1993年（平成5年）には各種リストラを断行し黒字化を実現した。
これを機に、実績、技術ともにトップクラスの中小型缶と安定した需要のあるファイバー缶に加えて、マーケットで中小型缶の10倍以上の実績を誇る200L缶の製造への参入を果たすことが経営陣の夢であり業容拡大のための大命題となった。
このような環境下、1993年（平成5年）11月にドラム缶製造に魅力を感じていた神戸製鋼所が本事業に積極的に参画の意向を表明、安田火災も神戸製鋼所の方針を前向きに受け止めた。
その後、住友商事を含めた3社間で協議が続けられ1996年（平成8年）1月に最終合意に至った。
これに伴い神戸製鋼所、住友商事に対し第三者割当増資を行い、資本金4億9,000万円（発行株式数4,200,000株）となった。
200L缶は大阪工場で製造することで決定し、住友商事からの借入金14億円を含む20億円を超える資金で設備移設、設備投資を実行して1997年（平成9年）4月に製造ラインを完成させた。
これを契機に社長は神戸製鋼所から招聘し、住友商事からも常勤役員が派遣され、200L缶の業容拡大に向けた新たな陣容となった。

更なる成長を目指して、新たな挑戦へ

第五章．拡大期　1999（平成11年）－2019（平成31年）

大阪第一工場　中小型缶・ステンレス缶

大阪第二工場　200L缶

1. 新生ダイカン誕生

中小型缶、ステンレス缶部門を大阪第一工場、200L缶部門を大阪第二工場として稼動、1998年（平成10年）から1999年（平成11年）にかけて、ISO9002を取得して新生ダイカンのスタートとなった。
200L缶の自動製造ラインは、神戸製鋼所の安定した鋼材供給を始めとする大株主や需要家の支援により、2000年（平成12年）度には82万缶を達成、販売缶数は順調に推移したものの償却負担が重く当初は赤字を余儀なくされた。
黒字化への転換のために各種経費削減、効率化を積極的に推進した結果、2006年（平成18年）度には200L缶の収益は黒字目前まで辿りついた。
また、2003年（平成15年）に取得していたISO9001に続き、2006年（平成18年）10月には環境面におけるISO14001を取得、2008年（平成20年）2月には新JIS規格を取得するに至った。

2. 苦境を乗り越え経営は安定へ

2008年（平成20年）9月のアメリカにおけるサブプライム問題に端を発したリーマンショック以降、世界経済は急激な下降局面に陥り、日本経済においても生産、輸出の大幅な減少、設備投資の抑制、雇用・所得の悪化等、負の連鎖により戦後最大の不況に突入した。
当社においても2008年（平成20年）度は約20%の減量となったが、各種経費削減、在庫圧縮、歩留向上等に積極的に取り組み、2010年（平成22年）度にはリーマンショック前の約90%まで回復した。

社会の出来事

- 1992（平成4年）
  - 欧州通貨危機発生
  - バルセロナオリンピック開催
- 1993（平成5年）
  - EU（ヨーロッパ連合）が発足
- 1994（平成6年）
  - 関西国際空港開港
  - 松本サリン事件発生
- 1996（平成8年）
  - アトランタオリンピック開催
- 1997（平成9年）
  - 消費税が3%から5%に増税
  - アジア通貨危機発生
- 1999（平成11年）
  - EU通貨統合で単一通貨（ユーロ）発行
- 2003（平成15年）
  - 郵政事業庁が日本郵政公社として運営開始
  - 新型肺炎SARSが世界的に大流行
- 2006（平成18年）
  - 日銀がゼロ金利を解除、景気は「いざなぎ」超え
- 2008（平成20年）
  - リーマン・ブラザーズが経営破綻、不動産バブルの崩壊が世界的金融危機に拡大
- 2009（平成21年）
  - マイケル・ジャクソン死去
  - 日経平均終値、バブル後の最安値を更新
- 2010（平成22年）
  - 日本航空、会社更生法適用申請
  - 記録的な猛暑

2010年（平成22年）度は200L缶初期投資の減価償却が完了したことから、200L缶の経常利益が黒字転換となった年でもあった。
2011年（平成23年）度以降は、営業力強化、品質向上、技術力向上、設備保全の徹底、生産性向上、安全活動の推進に積極的に取り組んできた結果、経常利益の黒字を達成している。
一方、恒常的な黒字化を達成し財務体質も強化されてきたものの、漸減していくマーケットからいかに安定した収益を確保するかという新たな経営課題に直面している。
このような中、2014年（平成26年）はファイバー缶用鉄蓋を生産していたデーケーシー開発を清算し、東海工場での内製化に踏み切るファイバー缶事業部にとって節目の年となった。
毎年市場環境は厳しくなっているが、ファイバー缶事業部は、紙粉低減缶という新商品の実現と特許取得、神戸製鋼所向けを足がかりにファイバーパック市場に再参入し収益拡大に向けて努力を続けている。

3．100 周年に向けて

2016年（平成28年）に更なる飛躍を目指して第1次中期経営計画を策定した。
そのような中、2015年（平成27年）より技術部を中心とした当社プロジェクトチームとDNPとで共同開発したDNPケミカルキャリアバッグが2018年(平成30年)12月に商品化した。
この製品は、環境に配慮した新世代のドラム缶として新しいマーケットの創造が期待されている。
2018年（平成30年）は、自然災害の多い年でもあった。
６月に阪神・淡路大震災以来の震災被害となる大阪府北部地震、9月の記録的な暴風となった台風21号は、当社にも少なからず被害があったものの幸いにも従業員は全員無事であった。
また、長年の懸案事項であった少量危険物取扱所から一般危険物取扱所となるための大阪工場リフレッシュプロジェクトがスタートした。
これは品質のダイカンをより強固にするためのヘリウムリークテスター、外装予熱炉の導入という戦略投資を同時に行う大型プロジェクトであった。
この一連のプロジェクトは200L缶製造ライン立ち上げ以来の大規模投資となった。
工場リフレッシュ工事は2018年（平成30年）10月に完工予定であったが、監督官庁との調整は困難を極め、実際に工事の許可が下りたのは2019年（平成31年）に入ってからであった。
このため、当初予定からの大幅なスケジュール変更を余儀なくされ完工予定は2020年（令和2年）となった。
2019年(平成31年)4月に100周年を迎え、目まぐるしい環境変化に対応し次の100年に向けて新たな一歩を進めるため、3年後に売上高60億、経常利益3億円を目標とする第2次中期経営計画を策定した。
この目標を達成するため従業員一丸となって邁進している。

社会の出来事

2013（平成25年）	2014（平成26年）	2015（平成27年）	2016（平成28年）	2017（平成29年）	2018（平成30年）	2019（平成31年）
・東京オリンピック・パラリンピック招致決定 ・世界遺産登録で富士登山の人気高まる	・消費税が５％から８％に増税 ・あべのハルカスが完成（日本最高層ビル）	・北陸新幹線開業 ・ギリシャ債務問題でユーロ危機	・イチロー選手が日米通算４２５７安打を達成 ・マイナンバー制度の利用が開始	・アメリカ第45代大統領にドナルド・トランプ就任	・平昌オリンピック開催、冬季五輪最多のメダルを獲得	・天皇退位により新元号（令和）へ ・イチロー選手引退

関連会社のトピックス

九州ダイカン株式会社

九州ダイカン株式会社

大型プラスティック容器製造のために、1964年（昭和39年）資本金2,000万円のダイカン工業株式会社を当社が全額出資し設立した。
1969年（昭和44年）9月にはダイカン工業隣接の倉庫を買収してファイバー缶工場を併設し業容を拡大した（その後、1980年（昭和55年）に資本金を3,000万とし、1995年（平成7年）には九州ダイカン株式会社へと社名変更）。
2015年（平成27年）には、紙粉低減缶を開発し収益力を高めることに成功した。
2017年（平成29年）7月に新工場竣工、ファイバー缶事業部の中核工場として稼働を始めた。

＜会社概要＞

設　　立：1969年（昭和44年）9月
資 本 金：3,000万円（当社100％子会社）
従業員数：21名（含非常勤）
年　　商：2億円
事業内容：ファイバー缶製造、販売
所 在 地：長崎県佐世保市江迎町埋立１

ダイカン今井ロジ株式会社

1994年（平成6年）に株式会社ダイカンロジスティクスをダイカン本社内に設立、2009年（平成21年）2月に大運所有の全株式を当社が取得し100％子会社化した。
2016年（平成28年）6月に確実な配車、復荷対応による収益力向上を目的として、今井運送の出資を仰ぎ「ダイカン今井ロジ株式会社」へ社名変更し組織力を強化した。

＜会社概要＞

設　　立：1994年（平成6年）5月
資 本 金：1,000万円
（当社60％、今井運送40％）
従業員数：17名（含非常勤、出向者）
年　　商：4億円
事業内容：第1種利用運送事業、倉庫管理業
所 在 地：ダイカン本社敷地内

株式会社大運

2009年（平成21年）1月に経営者の健康上の理由と経営悪化に伴い廃業若しくは売却の方針が打ち出された。
当社製品を運搬する重要な位置づけであったことから、廃業の選択を捨てて2009年（平成21年）7月に当社100％子会社化した。

＜会社概要＞

設　　立：1960年（昭和35年）11月
資 本 金：1,000万円（当社100％子会社）
従業員数：16名（含非常勤）
年　　商：1億円
事業内容：一般貨物自動車運送事業
所 在 地：ダイカン本社敷地内

年表（当社の主な歩み）

	当社の主な歩み	社会の出来事
1919 （大正8年）	•創業 吉房仁三郎（吉房庄次郎の次男）が独立して、 4月25日に大阪市北区長柄で 固形塗料用鉄製丸缶の製造販売を開始	•ヴェルサイユ条約締結
1935 （昭和10年）	•資本金60万円の株式会社へ改組して 「株式会社大阪製罐所」を発足	•忠犬ハチ公が亡くなり、駅前に銅像が建立
1939 （昭和14年）	•大淀工場で200L缶も製造開始	•第二次世界大戦勃発 •国家総動員法による「国民徴用令」が公布・施行
1942 （昭和17年）	•仁三郎の死去により、 1月に庄次郎の四男である一雄が社長に就任	•関門海峡トンネル開通 •ミッドウェー海戦
1948 （昭和23年）	•関東地区の販売拠点として、 東京営業所を港区新堀町に開設	•美空ひばりさんが「河童ブギウギ」でデビュー •極東国際軍事裁判判決
1951 （昭和26年）	•JISを取得する《業界内トップクラスに成長》	•日米安全保障条約調印
1958 （昭和33年）	•ファイバー缶業界へ進出	•皇太子・明仁親王と正田美智子さんが婚約
1959 （昭和34年）	•ファイバー缶の製造を開始	•化学業界を機軸として大量消費の時代に突入し ドラム缶の需要が急速に拡大する
1961 （昭和36年）	•大淀工場内にファイバー缶製造のための第二工場を建設	•アメリカ第35代大統領にジョン・F・ケネディ就任 •NHK朝の連続テレビ小説放送開始
1963 （昭和38年）	•名古屋営業所を開設	•新千円札（伊藤博文肖像）発行
1964 （昭和39年）	•福岡出張所を開設	•東京オリンピック開催 •東海道新幹線開業
1966 （昭和41年）	•名古屋工場（現.東海工場）を建設	•ビートルズ来日 •日本の総人口が1億人突破
1967 （昭和42年）	•本社を大阪から東京に移転	•初の「建国記念日」
1969 （昭和44年）	•ダイカン工業（現.九州ダイカン株式会社）隣接の 倉庫を買収してファイバー缶工場を併設	•人類初の有人月面着陸 •東名高速道路全区間開通
1970 （昭和45年）	•千葉工場を建設	•日本万国博覧会開催
1973 （昭和48年）	•200L缶の自社生産から撤退	•オイルショックが始まる
1974 （昭和49年）	•枚方工場を建設	•長島茂雄選手（巨人）現役引退 •戦後初のマイナス成長
1982 （昭和57年）	•大淀工場は大阪市に約45億円で買収される （淀川リバーサイド地区整備計画の計画地域の為） •此花区島屋2丁目の川崎重工大阪北工場跡地を購入し、 大阪工場として新工場建設に着手	•500円硬貨登場 •東北新幹線、上越新幹線開通 •ソニーが世界初のCDプレーヤー発売
1983 （昭和58年）	•大阪工場完成 •富山営業所を開設	•東京ディズニーランド開園 •任天堂が「ファミリーコンピュータ（ファミコン）」を発売
1987 （昭和62年）	•富山工場を建設 中小型缶のシェアが関西で80%以上に飛躍的に拡大	•国鉄が分割・民営化、JRグループが発足 •世界の人口が50億人突破

年表（当社の主な歩み）

	当社の主な歩み	社会の出来事
1992 （平成4年）	•本社を東京より大阪に移転	•欧州通貨危機発生 •バルセロナオリンピック開催
1993 （平成5年）	•富山工場、富山・福岡・名古屋の各営業所閉鎖 •シンボルマーク制定	•EU（ヨーロッパ連合）が発足
1994 （平成6年）	•千葉工場閉鎖 •4月25日をもって社名を「株式会社大阪製罐所」から 「ダイカン株式会社」に変更 •名古屋工場を東海工場に名称変更	•関西国際空港開港 •松本サリン事件発生
1996 （平成8年）	•神戸製鋼所、住友商事に第三者割当増資を行い 資本金4億9,000万円に	•アトランタオリンピック開催
1997 （平成9年）	•大阪工場に200L缶の製造ラインが完成	•消費税が3%から5%に増税 •アジア通貨危機発生
1999 （平成11年）	•ISO9002を認証取得	•EU通貨統合で単一通貨（ユーロ）発行
2003 （平成15年）	•ISO9001：2000を認証取得	•郵政事業庁が日本郵政公社として運営開始 •新型肺炎SARSが世界的に大流行
2006 （平成18年）	•ISO14001を認証取得	•日銀がゼロ金利を解除、景気は「いざなぎ」超え
2008 （平成20年）	•新JIS規格を取得	•リーマン・ブラザーズが経営破綻、 不動産バブルの崩壊が世界的金融危機に拡大
2009 （平成21年）	•本州リーム向けファイバー缶OEM開始	•マイケル・ジャクソン死去 •日経平均終値、バブル後の最安値を更新
2010 （平成22年）	•200L缶経常利益黒字に転換	•日本航空、会社更生法適用申請 •記録的な猛暑
2013 （平成25年）	•リーマンショック以降の最高益を達成	•東京オリンピック・パラリンピック招致決定 •世界遺産登録で富士登山の人気高まる
2014 （平成26年）	•デーケーシー開発を吸収合併 •東海工場で鉄蓋製造開始	•消費税が5%から8%に増税 •あべのハルカスが完成（日本最高層ビル）
2015 （平成27年）	•枚方工場でファイバーパックの製造開始 •九州ダイカンで紙粉低減缶製造開始 •DNPと共同で新商品の開発に着手	•北陸新幹線開業 •ギリシャ債務問題でユーロ危機
2016 （平成28年）	•第1次中期経営計画を策定 •紙粉低減缶に関する特許取得 •株式会社ダイカンロジスティクスから ダイカン今井ロジ株式会社へ社名変更	•イチロー選手が日米通算4257安打を達成 •マイナンバー制度の利用が開始
2017 （平成29年）	•パズル缶(ファイバー缶)に関する特許取得 •九州ダイカン新工場竣工	•アメリカ第45代大統領にドナルド・トランプ就任
2018 （平成30年）	•大阪工場リフレッシュ工事プロジェクトスタート •DNPと共同開発したDNPケミカルキャリアバッグが商品化	•平昌オリンピック開催、 冬季五輪最多のメダルを獲得
2019 （平成31年）	•創業100周年記念行事を開催 •第2次中期経営計画を策定	•天皇退位により新元号（令和）へ •イチロー選手引退

クラブ活動【野球部】

野球部の歴史は長く、1987年（昭和62年）から1991年（平成3年）にかけて昼休み時に大阪工場の遊休地（現在の本社事務所玄関前駐車場）を利用して製造と事務所関係者十数名の有志でソフトボールをしていたのが始まりです。1991年（平成3年）の秋ごろ、当時の営業本部長の「チームを作って連盟に加入しよう！」という一声から1992年（平成4年）、チーム名“ダイカン”を結成しました。しかし、試合は「守れない・打てない」で、コールド負けも幾度も味わい初戦敗退が10年以上続いたことで、会社内からも「此花支部のお荷物チーム」とうわさをされる程のチームでした。また、発足時のメンバーの高齢化も進み、連敗続きでチーム内の覇気もなくなり、試合日が決まってもメンバーが揃わず棄権するなど、一時は連盟会費を払い活動できない状況でした。そのような中、2006年（平成18年）ごろから当時の若手メンバーが中心となってメンバーの補強に動きました。その努力の結果、2012年（平成24年）には20名が在籍することとなり、その後、試合をするたびに投打も噛み合うようになりました。野球部発足22年目にして春季大会C級で優勝することもできました。

クラブ活動【フットサル】

ダイカンフットサル部は2010年（平成22年）南アフリカワールドカップの時に発足しました。当初は同好会程度の活動でしたが、たくさんの方のご尽力により正式にクラブとして認められた経緯があります。初心者でも試合で活躍でき、楽しく明るいプレーがモットーです。写真は、キャプテン翼スタジアム新大阪で行われた大会で予選の3戦を全勝し、その勢いのまま見事優勝した時のものです。

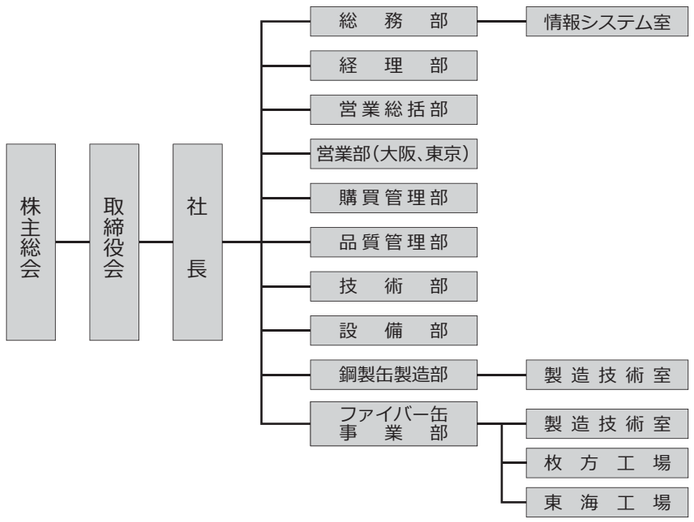
レクリエーション【BBQ】

4月初旬、満開の桜のもと、毎年BBQ大会を開催しています。ダイカンのみならず、関連会社を含めた全社行事となっており、普段なかなか接することのない仲間と話すことのできる貴重な時間となっています。2018年（平成30年）は桜の開花が例年より早く、BBQをする頃にはすでに桜は散っていましたが、従業員の笑顔で満開でした。

会社概要

- 社　　名 ：ダイカン株式会社
- 創　　業 ：1919年（大正8年）4月25日
- 設　　立 ：1935年（昭和10年）1月29日
- 資 本 金 ：4億9,000万円
- 年　　商 ：50億円
- 事業内容 ：スチール缶、ファイバー缶の製造販売
- 役　　員 ：代表取締役　林　亮司
  常務取締役　宇都　英樹
  取締役　喜多　信行
  取締役　瀬古　昌和
  取締役（非常勤）　永野　義典
  取締役（非常勤）　松澤　義明
  監査役（非常勤）　松山　哲
  監査役（非常勤）　大川内 由美子
- 従業員数 ：170名
- 主要取引銀行 ：みずほ銀行
  三菱ＵＦＪ銀行
  りそな銀行
  商工組合中央金庫
  日本政策金融公庫
  伊予銀行
  関西みらい銀行
- 本　　社 ：〒554-0024 大阪府大阪市此花区島屋2-11-63
  TEL.06-6466-4601㈹ FAX.06-6466-2090
- 事 業 所 ：本社／鋼製缶製造部・営業部（大阪・東京）・枚方工場・東海工場
- 関連会社 ：九州ダイカン株式会社／ダイカン今井ロジ株式会社／株式会社大運

組織図



経営理念

容器事業を通じて社会の発展に貢献します。

経営方針

1.良質な製品・サービスを提供し、お客様の信頼に応えます。

2.人権を尊重し、法令・規範を遵守し、社会から信頼される会社になります。

3.環境の保全に努め、美しい地球を守ります。

4.総合容器メーカーとして強い経営基盤を築き、企業価値の最大化を図ります。

企業の社会的責任（CSR）への取り組み

1.良き企業市民として、事業活動を通じて豊かな社会づくりに貢献します。

2.高い企業倫理に基づく公正で健全な事業活動を行います。

3.環境保全に努め、持続可能な社会の実現に貢献します。

4.すべてのステークホルダーとの良好な信頼関係を維持します。

行動規範

1.整理・整頓・清掃を励行し、品質向上に努めます。

2.風通しの良いコミュニケーションを通じ、安全・快適な職場を作ります。

3.すべてのお取引先と、透明性の高い公正な関係を維持します。

4.反社会的勢力に対しては、毅然とした態度を貫きます。

ISO14001・ISO9001取得に伴う基本理念

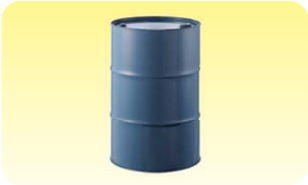
1999年に全社ISO9002（品質マネジメントシステム）を認証取得、2003年に全社ISO9001を認証取得しました。2006年にはISO14001（環境マネジメントシステム）を認証取得しました。当社はその要求基準に則り、業務を遂行しています。

様々な用途に対応する、豊富な製品ラインナップ

スチール缶〔200L・中型・小型〕

200L クローズ

一般的なドラム缶で、石油、化学関係等の液体製品の容器として用いられています。



200L オープン

天蓋の開閉ができ、固体・粉体および粘度の高い内容物の容器として用いられています。

中小型 クローズ・オープン 15L～180L

潤滑油、化学品、農薬品、食品等の少量、定量販売に用いられています。

20L クローズ フロン代替等低沸点適応品

鋼板が厚いドラム缶で２種類の形状タイプが選択できます。通常２０Ｌ缶と比較し、変形に強く溶剤系での使用に高い実績を誇ります。

ステンレス缶

ステンレス缶 20L～200L

耐食性、耐薬品性に優れ食品・医薬品用と幅広い用途に適しています。巻締部を溶接しているため漏洩の心配はなく落下・衝撃にも強く、長期的に繰り返し使用が可能です。

ファイバー（紙製）缶〔鉄蓋式ファイバー缶・オールファイバー缶〕

鉄蓋式

クラフトライナー原紙を主材料とした容器で粉体・粒状の工業製品・医薬品・食品等の運搬・貯蔵用容器として幅広く用いられています。蓋と本体をバンドで締め付け密閉できる、標準的なタイプです。

ワイヤー収納タイプ（ファイバーパック）

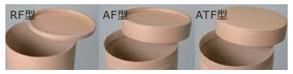
蓋とバンドを締め付けるだけで密閉できるロックリングタイプをベースに、ワイヤー収納用途に各部を強化したファイバー缶です。

CF型

蓋、本体ともにクラフトライナー原紙で構成しており、蓋および底部は積層したクラフトライナー原紙を加熱圧着したタイプです。粘着テープを貼ることで簡単にシールが可能です。

ミシン型

蓋、本体ともにクラフトライナー原紙で構成しており、ミシン糸で縫い合わせたタイプです。使用後の処理が比較的簡単で環境に配慮した容器です。



その他特殊仕様

《ラミネートタイプ》

缶の内側にラミネート加工紙を貼り合わせたタイプで防水・防湿を要する内容物に用いられています。

《高温処理防虫タイプ》

製造工程で熱風処理を施した容器で医薬関連向けに用いられています。

《ピールカットタイプ》

ロックリングタイプにおいて本体上下部位のテープをめくることにより蓋と底部の金属部と本体のライナー原紙が分離でき、ご使用後の処理が容易にできます。

ダイカン株式会社

本　　社
〒554-0024 大阪市此花区島屋2-11-63
TEL 06-6466-4601(代) FAX 06-6466-2090
E-mail info@daikan-d.co.jp

鋼製缶製造部
〒554-0024 大阪市此花区島屋2-11-63
TEL 06-6466-4511(代) FAX 06-6466-4608

営業部(大阪)
〒554-0024 大阪市此花区島屋2-11-63
TEL 06-6466-4501(代) FAX 06-6466-4608

枚方工場
〒573-0131 大阪府枚方市春日野1-1-30
TEL 072-858-0751(代) FAX 072-859-3036

営業部(東京)
〒103-0023 東京都中央区日本橋本町4-8-16 千城ビル6階
TEL 03-3272-9371(代) FAX 03-3272-9375

東海工場
〒448-0803 愛知県刈谷市野田町北地蔵山1-17
TEL 0566-21-2857(代) FAX 0566-22-6659

関連会社
九州ダイカン株式会社
ダイカン今井ロジ株式会社
株式会社大運